



福原敏男氏

公開学術講演会 「描かれた近世の祭礼」

福原敏男 (武蔵大学教授)

平成二十八年十月二十二日、福原敏男氏 (武蔵大学教授) を講師に招き、公開学術講演会「描かれた近世の祭礼」を開催した。

平成二十七年、日本政府は、すでにユネスコ (国連教育科学文化機関) の「人類の無形文化遺産の代表的な一覧表」 (代表一覧表) (ユネスコ無形文化遺産) に記載されていた日立風流物 (茨城県)、京都祇園祭の山鉦行事 (京都府) を含む日本各地の山鉦・屋台行事 (三十三件) をグループ化し、ユネスコに対して登録提案を行った。このグループには八百三社大祭の山車行事 (青森県)、秩父祭



Vol.10 No.2
発行人 井上 順孝
編集人 平藤喜久子
〒150-8440 東京都渋谷区東4丁目10番28号
電話 (03) 5466-0104
FAX (03) 5466-9237

の屋台行事と神楽 (埼玉県)、佐原の山車行事 (千葉)、尾張津島天王祭の楽車舟行事 (愛知県)、博多祇園山笠行事 (福岡県)、唐津くんち曳山行事 (佐賀県) などが含まれる。
本講演会が行われた後の平成二十八年十一月一日、無形文化遺産保護条約政府間委員会の評価機関より「記載」の勧告があり、十二月には正式に記載された。
本年度、「描かれた近世の祭礼」として公開学術講演会を行ったのは、日本の祭礼文化が無形文化遺産になることを見込んだことである。なお、國學院大學博物館では、本講演会に関連した企画展「祭礼行列―渡る神と人―」を開催した。
福原氏は、
①『つしま祭』絵巻 (國學院大學図書館所蔵)
②『神田明神御祭礼御用御雇祭絵巻』巻五 (国立国会図書館所蔵)
③歌川国郷『神田大明神御祭礼図』 (国立歴史民俗博物館所蔵)
について、画像を示し、それを解説

目次

- ◆ 公開学術講演会 「描かれた近世の祭礼」 1
- ◆ 平成二十八年度特別展
 火焰型土器のデザインと機能 Jomoneseque Japan 2016 3
- ◆ 東アジア国際ワークショップ・国際研究フォーラム
 「東アジアのグローバル化と宗教文化」 4
- ◆ 第四十二回日本文化を知る講座「日本列島藝能史」 6
- ◆ 二十一世紀研究教育計画委員会研究事業
 「古事記学」の構築」活動報告 8
- ◆ 二十一世紀研究教育計画委員会研究事業
 「地域・共合から発進する共存社会の構築」活動報告 10
- ◆ 平成二十八年度國學院大學博物館活動報告 11
- ◆ 平成二十八年度國學院大學博物館ミュージアム連携事業・報告 12
- ◆ 彙報 14
- ◆ 資料紹介「創立七十周年 高松宮宣仁親王殿下御言葉」 16

する形で、講演をすすめた。
①は尾張津島天王祭の楽車舟行事 (津島神社、愛知県) に関わるものであり、②③は神田明神祭礼 (神田神社・神田祭、東京都) に関わるものである。
はじめに
まず福原氏は導入として、近世の行列について次のように概説した。
琉球慶賀使節や朝鮮通信使節のような外交使節の行列、婚姻行列、葬送行列、祭礼行列、武家の行列など、近世の行列は、ある権力者のもとで肅々と整列させられて渡っている。
平成二十四年に国立歴史民俗博物館で行われた企画展「行列にみる近世―武士と異国と祭礼と―」におけるコンセプトは「渡らされる」であった。

近世の祭礼資料をみると「通物」とある。これは、お囃子を奏しながら仮装して物語を装って行列するものを言う。これを「通り物」「通し物」のどちらで読むかは判断し難いが、主体が参加者であれば「通り物」と読める。一方、権力者からの視点であれば「通し物」となる。また、「渡物」の語も「渡り物」とよむのか「渡し物」とよむのかは難しい問題である。
続いて、自らの視点について、祭礼図研究は主に美術史の研究者によって進められてきた。その研究では、絵画表現が重要であるとし、歴史民俗学的な視点ではとらえていない。一方で、絵画表現を重視するプロの作例ではなくても、絵空事が排された祭礼図を記録画、歴史民俗資料として評価したいとした。
・國學院大學図書館所蔵『つしま祭』絵巻 楽車・大山の疑問
福原氏はまず、ギメ美術館所蔵『津

もっと日本を。もっと世界へ。



國學院大學

鳥祭礼図屏風』、大英博物館所蔵『津島神社祭礼図屏風』を用いて、尾張津島天王祭（津島祭）の特徴を次のように説明した。

同祭礼では、前夜祭（宵祭）には竹の先に数多くの提灯を付けた巻藁船、翌日の朝祭には楽車船が出ていた。また、明治四年（一八七二）まで朝祭に出ていた大山は、全高二〇メートルほどの大きなもので、手摩乳・脚摩乳と呼ばれる「高砂」のよくな人形や「からくり」がのせられていた。大山は濃尾平野、中京圏の祭礼に分布していた。

一方、楽車船の上には、毎年、異なる人形が飾られ、その下では稚児が腰に鞆鼓を付けて舞う。

次いで、國學院大學図書館所蔵『つしま祭』絵巻の解説に移り、屏風は祭礼の様子を一目瞭然にパノラミックに描くことができる。対して、絵巻は時間的な進行と空間的な移動を示すには良いが、天地幅が和紙の幅に規定される。このため、『つしま祭』絵巻の大山や楽車船は、ギメ美術館や大英博物館所蔵の屏風に比し



大山（『つしま祭』絵巻〈國學院大學図書館所蔵〉）

て、押しつぶされて描かれているとした。

次に諸記録と『つしま祭』絵巻とを比較すると、多くの点で異なる部分があるとし、実際にこの祭礼を観たことがない人物が、地誌の類や伝聞情報をもとに描いたのではないかと論じた。さらに、本絵巻を記録画として用いるためには同時代の文献資料と対照することが必要である。研究は様々な資料を比較検討する中で進んでゆくの、今後、本絵巻から記録画として使える部分を汲み取ってゆくことが、本絵巻の祭礼図研究としての目的の一つであるとの見通しを述べた。

・神田祭に猿の生き肝（『神田明神御祭礼御用御雇祭絵巻』巻五）

まず、近世の肉筆祭礼図は、都市祭礼を描いたものが多く、なかでも近世の政治都市である城下町の祭礼を描いたものが多いと述べたうえで、祭礼行列は神輿や神職、僧などの宗教施設側が出すもの、町人が出す山車や附祭、藩士や与力・同心による警固という三部構成でなっていると説明した。そして、神田祭（神田明神祭）の場合、町人たちが三十六組の定番の出し物を出し、これらに加えて附祭や御雇祭がつく。これは基本的に毎回、趣向を変えるものであり、前者は山車構成町が出したのに対し、後者は町奉行が費用の一部を援助して、それ以外の町人に出させたもので、附祭と同じような出し物を出したと説明した。

国立国会図書館所蔵『神田明神御

祭礼御雇絵巻』は文政八年（一八二五）の神田祭の様子を描いたものである。同年は元大坂町や住吉町などが昔噺をテーマに御雇祭を出している（都市と祭礼研究会編『江戸天下祭絵巻の世界』うたい おどりはける『神田明神選書』2 岩田書院、二〇一一年）。

福原氏が解説した巻五は元大坂町（現在の中央区日本橋人形町一丁目相当）の御雇祭を描いている。同町は神田明神の氏子ではないが、御雇祭として「竜神管弦の学び」を出している。これには形名旗のような旗（上り竜、下り竜）、管弦（笙、横笛、唐人笛、柄太鼓、胡弓など）、警固、竜宮の乙姫、奴が行列し、竜宮乙姫の曳物、竜宮城の曳物が続いた。福原氏は、装束、楽器などについて細かな解説を加えた。なかでも行列の先頭には朝鮮通信使節を先導する形名旗のような旗がみえ、管弦の人々はサンゴを装飾した傘をさしかけられ、傘を持つ人は魚の装飾の付いた笠をかぶる点に注目し、町人達は、異国と異界である龍宮のイメージを重ね合わせていたのであろうとした。

龍宮城の曳物には壺を持つ猿が描かれている。福原氏は、これを昔噺「猿の生き肝」に依拠したもので、猿が自分の生肝を病の乙姫に差し出す姿ではないかと述べた。そして、それにより、行列に連なる乙姫の病が治って元気な姿を見せるといふ祭礼ならぬめでたい話とする行列に仕立てたのではないかと論じた。

・歌川国郷錦絵の資料性

歌川国郷（一八五八）は国貞（一七八六―一八六五）の弟子で、安政四年（一八五七）に五枚続きの錦絵「神田大明神御祭礼図」、翌年に六枚続きの「山王様御祭礼図」を版行した。「神田大明神御祭礼図」には、「吹貫型」二、「岩組型」一、「傘鉾型」一八、「万灯（度）型」一、「二層櫓勾欄人形型（江戸型）」三、「一本柱勾欄人形型」一が描かれていると分析した。

しかし、史資料から、当時、ペリー来航以来の内憂外患等によって、本格的な祭礼はできていないことがわかるとした。

次いで、「江戸天下祭図屏風（江戸山王祭礼図屏風）」（個人蔵）や『守貞謄稿』に描かれた傘鉾を示しながら、江戸型山車の成立過程について述べ、江戸型山車は、安政期になつてから見られるもので、真ん中に二層の櫓をとりつけ、四方に幕を回して一番上に勾欄を付けて人形を飾るものであるとした。

次いで「神田大明神御祭礼図」には、この形式の山車が多く描かれていることから、様々な時代の山車を寄せ集めて描かれているのではないかと論じた。

最後に「神田大明神御祭礼図」に描かれている山車や行列について、一点ずつ解説した。

このように福原氏は、近世の祭礼図（絵画資料）を分析するにあたり、美術的な表現という視点を排除し、記録画としての祭礼図を歴史民俗学の視点から分析した。

（文責・大東敬明）

平成二十八年年度特別展 火焰型土器のデザインと機能 Jomonque Japan 2016



国宝 火焰型土器 笹山遺跡(新潟県)

火焰型土器とは

火焰型土器は昭和十一(一九三六)年、近藤篤三郎らの調査によって新潟県長岡市の馬高遺跡で初めて出土した。この調査による出土第一号の土器のみを「火焰土器」と称し、他のものや他遺跡出土のものを「火焰型土器」と呼称する。その名の由来は四か所の鶏頭冠と呼ばれる大ぶりの把手に由来する。鶏頭冠は複雑な形状で、粘土紐によって裝飾され、把手以外の口縁部は鋸歯状に造作され、全体の形状が燃え上がる炎を思わせることから火焰の名を冠するのである。出土する地域は、一部東北地方南部や富山県域で出土例が知られるが、その中心は、新潟県域でも長岡市、十日町市、津南町など信濃川中流域に集中する傾向がある。その奇抜なデザイン性と希少性から縄文時代を代表する土器型式の一つであると言っても過言ではない。

今回展示した指定物件である火焰型土器は、次のとおりである。国宝 十日町市笹山遺跡出土火焰型土器、国指定重要文化財長岡市馬高遺跡出土火焰型土器、同火焰型土器二点、津南町堂平遺跡出土火焰型土器二点(文化庁所蔵)に加え、国宝附である三角形土版や国指定重要文化財長岡市馬高遺跡出土土偶(ミス馬高)等多数の資料とこれらの指定物件に加え、未指定の一四点もの火焰型土器、王冠型土器を一同に列品したのである。

特別展示の趣旨と経緯

展示は國學院大學博物館と信濃川火焰街道連携協議会(新潟市、三条市、長岡市、十日町市、津南町)、新潟県立歴史博物館の三団体が主催し、平成二十八年十二月十日から平成二十九年二月五日の期間で実施したものである。本企画は、信濃川火焰街道連携協議会が火焰型土器を含む地域の文化財を『なんだ、コレは!』信濃川流域の火焰型土器と雪国の文化』として、日本遺産申請を行い、平成二十八年年度の認定に至ったことを記念して計画立案されたものである。また、日本文化を象徴する文化財のひとつとして「火焰型土器」を周知し、「火焰型土器を二〇二〇年東京オリンピック・パラリンピックの聖火台に」というアピール宣言への賛同を募るといふ動機もある。

。同時に開催した「国際縄文フォーラム火焰街道往来2016」も同様に、日本遺産認定を記念し、講演及び報告と討論で構成する火焰型土器及び縄文文化の一般への周知と浸透を目指した催しであった。

そもそも本館が展示公開、イベントの開催会場としてこの特別展企画を引き受けた理由は、本学名誉教授で縄文時代研究の泰斗である小林達雄氏の引き立てを受けたからに他ならない。これまでに例のない国宝を含む一一点の重要文化財指定の火焰型土器、火焰型土器を新形県外で見ることが出来る初の特別展示であったことも本館にとって大きなメリットであった。また、本館が平成二十年の開館以来寄託を受けている新潟県長岡市岩野原遺跡出土火焰型土器(神林修氏蔵)の存在もまた、本特別展を導引する大きな意味を有するものであった。

しかし、多数の国宝・重要文化財を展示公開するには、現状で公開承認施設となっていない本館にとって、施設、什器等の面で大きなハードルを超えなければならなかった事もまた事実である。例えば空調管理システムの改修や免震ケースの新造などが必要となったため大学当局には、全面的な支援を賜った。また、準備段階から文化庁美術学芸課文化財管理指導官の宇田川滋正氏、同課原田昌幸氏、東京文化財研究所保存科学研究センター保存環境研究室長吉田直人氏には、展示指導ならびに館内環境改善等、こと細かなご指導を賜り、実現にこぎ着けることが出

来たのである。ここに改めて記して謝する次第である。

国際縄文フォーラムの開催

展示に加え平成二十八年十二月十日、十一日の二日間に亘り開催した国際フォーラムでは、基調講演を谷口康浩氏(本学教授)、河仁秀氏(韓国釜山近代歴史館館長)が行い、報告討論として阿部昭典氏(千葉大学)、菅野智則氏(東北大学)、領家玲美氏(相模原市教育委員会)、水ノ江和同氏(文化庁)、イローナ・パウシュ氏(東京大学大学院)、石井匠氏(当館学芸員)、今福利恵氏(山梨県埋蔵文化財センター)らによって国内外の最新の研究成果が報告された。討論では、コーディネーターの宮尾亨氏(新潟県立歴史博物館)によって、「中期縄文土器の過剰なデザインと多様な第二の道具」と題し、白熱した議論が展開されたのである。最後に小林達雄氏(本学名誉教授)の講話で締めくくられた。

イベント

会期中、信濃川火焰街道連携協議会の面々によるミュージアムツアーやエレキチェロ奏者の斎藤孝太郎氏による縄文コンサートなども実施され、聴衆を魅了したのである。

(文責・内川隆志)



展示の状況

東アジア国際ワークショップ・国際研究フォーラム 「東アジアのグローバル化と宗教文化」

二〇一六(平成二十八)年十月十六日に、日本文化研究所の主催で国際研究フォーラム「東アジアのグローバル化と宗教文化」が開催された。その前日十五日に行われた同題の東アジア国際ワークショップと連続した企画となる。以下合わせて内容を紹介する。

SISR2017準備 東アジア国際ワークショップ

十月十五日の十時から十八時にかけて、日本文化研究所と日本学術振興会科学研究費基盤研究B(海外学術調査)「アジアの政教関係と新しい公共宗教論構築の地域比較研究」(課題番号16H05712、研究代表者：櫻井義秀)が主催し、「宗教と社会」学会の後援を得て、「SISR2017準備 東アジア国際ワークショップ 東アジアのグローバル化と宗教文化」が開催された。本ワークショップは、もともと国際宗教社会学会(SISR)が二〇一七(平成二十九)年夏にメルボルンで学術大会を行う予定となっていたことを受け、その準備のために企画されたものである(なお、その後同学術大会はスイスのローザンヌにて開催されることになった)。広く東アジアの若手研究者・大学院生に参加を呼びかけ、英語での研究発表・議論を行った。

ワークショップは、それぞれ「東

アジアの社会参加型宗教・公共宗教」、「東アジアの宗教文化・宗教文化教育」、「東アジアの宗教運動・政教関係」という主題を持つ三つのセッションによって行われた。紙幅の関係上、以下に各セッションの報告者名のみを掲げる。

Session 1: Religious Engagement and Religious Actions in Public Sphere
Chair: Yoshihide Sakurai
[Hokkaido University]

Panelists: Aki Uchida [Tsukuba University]; Koki Shimizu [Hokkaido University]; Siyoon Lee [Sogang University]; Francis Lim [Nanyang Technological University]



ワークショップ会場の様子

Session 2: Religious Culture and Education of Religious Studies
Chair: Kikuko Hirafuji
[Kokugakuin University]

Panelists: Aki Murakami [Tsukuba University]; Shiho Toishiba [Tsukuba University]; Chae Young Kim [Sogang University]; Yoshihide Sakurai [Hokkaido University]

Session 3: New Religious Movement and Politico-Religious Relations
Chair: Nobutaka Inoue
[Kokugakuin University]

Panelists: NG, Ka Shing [Hokkaido University]; Tadatsu Tajima [Tenri University]; Yohei Fujino [Hokkaido University]; Yu Shuang Yao [Fo Guang University]

翌日の国際研究フォーラムの登壇者にもオブザーバーとして参加してもらい、二十名を越す参加者を得て充実した議論を行うことができた。なお、これらの発表について、二〇一七年度に内容をまとめて成果として刊行する予定である。

国際研究フォーラム

二〇一六年十月十六日午後、日本文化研究所の主催で国際研究フォーラム「東アジアのグローバル化と宗教文化」が開催された。本フォーラムでは、東アジアという地域に焦点を合わせ、グローバル化によってどのような宗教問題が顕在化したか、また人々の宗教に対する意識がどのように変化したのかといっ

た事柄を検討することを目指した。日本、台湾、中国などを主要な研究対象として、そこにおける宗教をめぐる現代的状況について検討している研究者四名に報告をお願いし、その後岩井洋氏(帝塚山大学学長)によるコメントを受けて総合討議を行った。なお、司会は櫻井義秀氏(北海道大学教授)にお願いした。以下、内容を紹介する。

報告(一)「中国共産党の宗教政策とグローバル展開」川田進氏(大阪工業大学教授)

川田氏は、まず中国共産党の宗教政策を概観し、文化大革命後に宗教に積極的な意義を見出して活用しているところとする方向性が見られるとし、いわば「マルクス主義宗教観の中国化」が進行しつつあるとした。現在、党は五つの宗教を公認して管理しつつ、宗教組織と交渉し、味方に付けて統一戦線を構築しようとしており、例えば習近平はシルクロード経済圏構想の実現に向けて、宗教界を活用しようとしていると指摘した。一般にチベット仏教については、チベット亡命政府と中国政府の対立状況に焦点が合わせられる傾向があるが、社会主義社会に対応して党と協力関係を築いている高僧の例として、四川省ララン五明仏学院のケンポ・ソダジの活動を紹介した。他方で、青海省コンヤブ寺の高僧ケンポ・カルツェについては、党に協力しつつ妥協しない姿勢を取ったが、チベット人の権利擁護を主張した後公安当局に拘束されたと述べた。



川田進氏

報告(二)「日本の若者は宗教をどう見ているのか—二〇年にわたる意識調査をてがかりに—」井上順孝氏(日本文化研究所所長)

井上氏は、現代の日本の若者がどのように宗教を見ているかを、実態調査に基づいて検討してみたいとして、まず一九九五(平成七)年から二〇一五(平成二七)年まで十二回に渡って行われた大学生宗教意識調査についてその概要を紹介した。例えば神棚や仏壇の設置率にはやや減少傾向が見られるのに対して、初詣や墓参の実施率についてはわずかながら増加傾向が見られるなど様々な分析結果を紹介し、イスラームについての関心の推移にも触れ、更にオウム真理教について二十年間一貫して高い関心が保持されていることを指摘した。その上で、グローバル化に伴って、例えばムスリム・モスクの増加など日本社会と宗教の関わり方がこれまでとは異なる新たな局面を迎えたことを指摘し、またそうした状況において宗教情報リテラシーの涵養が重要であること述べた上で、二〇一一(平成二十三)年に設立された宗教文化教育推進セ



井上順孝氏

ンターとその活動を紹介し、またその試みが日本を越えて行われていくべきではないかと述べた。

報告(三)「Religious "Modernization" and Challenge in Post-war Taiwan」Wei-hsian Chi 氏 (Research Fellow, Academia Sinica, Taiwan)

Chi氏はまず、戦後台湾の宗教をめぐる基本的な状況を概観して以下の三点を指摘した。即ち第一に、大陸から渡来した仏教が台湾社会における「仏教」理解を作り替えたこと、第二に西洋から渡来した様々なキリスト教が、競い合いながら活発な宣教活動を行っていること、第三に一九七〇年代以降、民俗宗教が盛んに行われるようになったことである。その上で、台湾における宗教は近代化に伴う社会変動にどのように対応すべきかを模索しており、特に一九九〇年代後半以降、以下の三点が特徴的に見られるようになってきているとする。即ち第一に、宗教組織は社会的な可視性をより意識するようになり、自らの社会の中における機能、役割を自覚的に検討するように



Wei-hsian Chi 氏

なった。第二に、スピリチュアル・ケアがより盛んに、かつ多様な形で宗教的活動として行われるようになった。第三に、宗教のメディア化であり、メディアが宗教的なコミュニケーションを変容させただけではなく、既にメディアは宗教の一部となっている。そして、このような変化はまた、どこまでが「宗教」であるのかという問いを投げかけているとした。

報告(四)「Changes in the Chinese Religious Landscape since 1989」Benjamin Penny 氏 (Associate Professor, Australian National University, Australia)

Penny氏は、まず現在の中華人民共和国における宗教状況について、中国共産党が社会調和の維持やその発展における宗教の意義を承認し、その活用を検討していることを指摘し、他方で外国からの影響の排除などを念頭に置いて、宗教組織に対する指導・管理を強めているとした。例えば、法制度上の変化に触れた上で、ある宗教組織を邪教として非合法化する権利を党が保持していると



Benjamin Penny 氏

し、法輪功など幾つかの組織を紹介した。続けて、イスラーム、チベット仏教、カトリック、プロテスタントの現況を概観し、それぞれ隆盛していると同時に、その脅威を認識している党による介入も見られるとした。最後に新しい傾向として、より社会参加を重視する仏教が台湾からもたらされたこと、また養生法のような世俗化された宗教実践が熱狂的に支持されていること、更に易や中国医学などの伝統的であると自己提示する諸実践が大衆化して広く行われていることなどが紹介された。

全体を通して、「東アジア」という文脈を、その中での違いにも目を向けながら考えていく必要性和同時に、「情報化」のもたらす影響やそれに伴う諸問題、またそれらにどのように対処していくかを検討していかなければならないことなどが議論され、今後も研究交流・意見交換を続けていくことの重要性が了解された。最終的に、百名ほどの参加者を得て、充実したフォーラムとなった。

第四十二回 日本文化を知る講座 「日本列島藝能史」

講座の概要

当機構が主催し、渋谷区教育委員会の後援を得て実施する「日本文化を知る講座」は、旧日本文化研究所時代から数えて四十二回目を迎えた。その目的は、本学独特の研究を、広く一般に公開するところにある。そこで今回は、國學院大學博物館の企画展「偶像（アイドル）の系譜―神々と藝能の一万年―」（会期：平成二十八年四月二十六日～六月十二日）にあわせて、「藝能」の考古学・歴史学・民俗学をテーマとした講座を企画した。

各回の講演者は、奈良大学文学部准教授の村上紀夫氏（第1回：五月二

十一日）、群馬県埋蔵文化財調査事業団上席専門員の石守晃氏（第2回：五月二十八日）、追手門学院大学地域創造型学部教授の橋本裕之氏（第3回：六月四日）、そして國學院大學博物館准教授の深澤太郎（第4回：六月十一日）である。発表者の意図を汲み取ることができているか恐れるものがあるが、各回の具体的な内容については、以下の概要を参照されたい。

① 江戸時代の大道芸

村上紀夫（奈良大学准教授）

当講座のポスター右上に掲げられた飴売の土平は、奇抜な姿をして歌を歌いながら飴を売り歩いてきた十八世紀後半の人物である。従来の日

本芸能史では、主に能・狂言・浄瑠璃・歌舞伎といったメインカルチャーが取り上げられてきた。しかし、彼らのような「雑芸能」などと呼ばれてきた人々こそ、過去の人々の感性や、時代の空気を感じさせてくれる存在なのではないだろうか。そこで本講座では、脇役と見られてきた大道芸を取り上げて、これまでサブカルチャーとみなされてきた彼らを、芸能史の中に位置付けていきたい。

今や、目にすることも希少になつた大道芸も、かつては当たり前前の光景であった。例えば、二百年ほど前の記録として、江戸幕府が全国で実施した風俗習慣に関する一斉調査の回答に『備後国福山領風俗問答状答』がある。そこでは、言触・大神楽・越後獅子・異形なる売薬師：などが列挙され、「諸国同様に徘徊往来仕候ものはしるし不申候」と見える。

また、E・S・モースの『日本その日その日』を紐解けば、明治初年における街角の芸能者たちの姿が記録されている。このような大道芸は、舞台芸能以上に身近な存在であったに違いないが、高度経済成長期を経た一九七〇年代になると、住環境の変化や、娯楽の多様化などの影響を受けて急速に衰退していった。

かかる芸能者には、貧困・障害を抱えた乞食・盲人のほか、半僧半俗の道心者や、面倒な人間関係を逃れた人々もいた。このように、差別などの消極的理由だけでなく、そこへ積極的に飛び込んでいく人々の存在が、「芸能」の懐の広さを物語っている。「芸」に活きざるを得ない人々の居場所＝生活手段を、丸ごと受け入れる社会が許容されるか否かは、近世・近代・現代とは何か、という問題とも通底しているのである。

大道芸は、ウケて儲からねばならないため、流行の変化にあわせて急激に姿を変えていく。史料が少ないだけでなく、具体的な実態も伝承されておらず、芸能を見る側の感性も変容してしまつた現代では難しい研究対象だが、単なる芸能の歴史ではなく、政治・権力・民衆と関わってきた芸能者の歴史を紐解いていくことが、これからの課題になるだろう。

② 古代日本の芸能と音楽の考古学

石守晃（群馬県埋蔵文化上席研究員）

芸能・音楽は、文化財の区分で言えば無形文化財に属する。一方、そもそも考古学は、有形資料を対象とする方法論であり、遺構や遺物など、遺跡から出土した資料に基づいて、形を残していない過去の音楽を研究するのが「音楽考古学」と定義される。

その主要な研究対象である楽器は、ヨーロッパの後期旧石器時代に骨笛が現れ、中国の新石器時代に骨笛や埙が見られるようになる。日本では、縄文時代前期の土鈴が古い。一般に、音楽は、メロディやハーモニーを重視した芸術性が評価され、それを奏する道具が楽器とされてきた。しかし、このような定義を、古代の楽器に当てはめることは困難であろう。骨髄を抜くために孔を開けた骨が笛になったり、石器製作の動作がリズムを刻んだりするように、道具の「転用」が楽器を生み出したのである。

平成28(2016)年度 第42回 日本文化を知る講座

目次

- 5月21日(土) 「江戸時代の大道芸」 村上紀夫(奈良大学文学部 准教授)
- 5月28日(土) 「古代日本の芸能と音楽の考古学」 石守晃(群馬県埋蔵文化財調査事業団 上席専門員)
- 6月4日(土) 「何が芸能なのか」 橋本裕之(追手門学院大学地域創造型学部 教授)
- 6月11日(土) 「偶像の系譜」 深澤太郎(國學院大學博物館 准教授)



日本列島 藝能史

国學院大學博物館 企画展

偶像の系譜

神々と藝能の一万年

4/26(火)～6/12(日) 入館無料

The History of Japanese performing arts

目次

5月21日・5月28日・6月4日・6月11日の各土曜日
13時30分～15時00分

会場 國學院大學 渋谷キャンパス 常盤松ホール(学術メディアセンター1階)
〒150-8501 東京都渋谷区東4-10-20 TEL: 03-5466-0104 FAX: 03-5466-9237

入場無料

事前申込制 各回先着300名

4月18日(前)～5月14日(迄) 申込書に提出済みの場合は、発行印刷費でも受付を終了しています。

ウェブ利用の場合: 國學院大學HP・イベントページの「日本文化を知る講座」案内ページにある申込フォームよりお申込みください。

■はがき・FAX利用の場合: (1) 郵便番号、(2) 住所、(3) 氏名(フリガナ)、(4) 電話番号、(5) 「日本文化を知る講座」参加希望の旨を明記の上、下記のお問い合わせ先までお送りください。

主催 國學院大學 研究開発推進機構事務局
〒150-8540 東京都渋谷区東4-10-20 TEL: 03-5466-0104 FAX: 03-5466-9237

主催 國學院大學 研究開発推進機構

後援 渋谷区教育委員会

もって日本を、もって世界へ。

國學院大學

抱えた乞食・盲人のほか、半僧半俗の道心者や、面倒な人間関係を逃れた人々もいた。このように、差別などの消極的理由だけでなく、そこへ積極的に飛び込んでいく人々の存在が、「芸能」の懐の広さを物語っている。「芸」に活きざるを得ない人々の居場所＝生活手段を、丸ごと受け入れる社会が許容されるか否かは、近世・近代・現代とは何か、という問題とも通底しているのである。

大道芸は、ウケて儲からねばならないため、流行の変化にあわせて急激に姿を変えていく。史料が少ないだけでなく、具体的な実態も伝承されておらず、芸能を見る側の感性も変容してしまつた現代では難しい研究対象だが、単なる芸能の歴史ではなく、政治・権力・民衆と関わってきた芸能者の歴史を紐解いていくことが、これからの課題になるだろう。

② 古代日本の芸能と音楽の考古学

石守晃（群馬県埋蔵文化上席研究員）

芸能・音楽は、文化財の区分で言えば無形文化財に属する。一方、そもそも考古学は、有形資料を対象とする方法論であり、遺構や遺物など、遺跡から出土した資料に基づいて、形を残していない過去の音楽を研究するのが「音楽考古学」と定義される。

その主要な研究対象である楽器は、ヨーロッパの後期旧石器時代に骨笛が現れ、中国の新石器時代に骨笛や埙が見られるようになる。日本では、縄文時代前期の土鈴が古い。一般に、音楽は、メロディやハーモニーを重視した芸術性が評価され、それを奏する道具が楽器とされてきた。しかし、このような定義を、古代の楽器に当てはめることは困難であろう。骨髄を抜くために孔を開けた骨が笛になったり、石器製作の動作がリズムを刻んだりするように、道具の「転用」が楽器を生み出したのである。

では、日本の出土楽器には、どの

ようなものが存在するのだろうか。以下では、レプリカや復元資料を演ししながら、その具体的な様相を概観していく。まず、縄文時代の楽器と言われる遺物には、土鈴・鹿笛や、縄文琴(篋状木製品)・陶鼓(有孔罌付土器)・すりざさら(刻骨)などがあるが、楽器か否か疑わしいものもある。弥生時代には、やまと琴や陶埴が現れたほか、中国の畜鈴に由来する銅鐸が朝鮮半島からもたらされた。古墳時代になると、楽器そのものだけでなく、埴輪に楽器の表現が見られるようになり、やまと琴・太鼓・角笛・四つ竹・鈴・弓などの音具が実在したことがわかる。また、記紀の記録を参照することにより、古墳時代にさかのぼる神事・儀礼・宴の場における歌舞音曲の様子も、かがい知ることが可能である。

このように、考古資料の中にも多様な楽器が見られるが、日本の楽器は、音律が調節された中国殷周の青銅器などとは異なり、統一された規格が見られない。この事実も、古代日本の楽器が合奏に適していないことを示している。少なくとも、古代日本の音楽は、歌が中心であり、音律そのものではなく、音そのものに関心があったのだろう。後世の能管・三味線・木遣りのように、不安定な音を好む日本人の感性も、一万年に及ぶ縄文時代から育まれてきた特質なのかもしれない。

③何が芸能なのか

橋本裕之(追手門学院大学教授)

本講座の出講を依頼された際に、「芸能とは何か」というテーマを提示

されたが、それでは哲学的な堂々巡りに終始せざるを得ない。むしろ、「何が芸能なのか」という問いを立てることによってこそ、芸能なるものが鮮明に見えてくるのではなからうか。

発表者は、かねてより若狭の王の舞などの研究に取り組んできた。この王の舞は、邪霊を払い道行く先を鎮めるために行われた呪術性の強い芸能である。汚穢に満ち溢れた京の穢れを祓い流すために行われた御霊会においても、疫病の原因と考えられた御霊を慰撫する芸能の一つとして演じられており、当時の人々の現実的な期待を受けていたに違いない。つまり、王の舞は、不特定多数の人間が集まってくる中世都市としての京都のあり方を前提とした芸能なのである。そして、芸能にとつて最も大切な「見る／見られる」関係が先駆的に見られるのが、恐らく都市という場なのだ。

一見まるで異なるもののように思われるかもしれないが、かつて研究に携わったストリップも、「見る／見られる」関係の中にあつた。これも、民俗芸能や大衆芸能などと並ぶ、芸能的な存在なのである。ちなみに発表者は、東日本大震災で被災した鶴鳥神楽(岩手県久慈市)の復興支援にも携わっており、今では見られる側である神楽衆の一人に名を連ねている。

さて、折口信夫も、芸能について「見せ物の対象になる芸が芸能である」(日本芸能史)・「日本の芸能といふものは、もとは芸能としての形をもつてゐなかつたものが、繰り返し行はれるうちにだんだん芸能化し

て来ました」(日本芸能史六講)と述べている。まさに、観客の発生によって、祭祀から芸能が生まれるのだ。従つて、「まれびと」だけでなく、「招かれざる客」が来訪することによって、はじめて芸能の条件が成り立つのである。

従つて、何が芸能なのか、という問いに答えるとするならば、「見る／見られる」関係によって規定される表現とすることができよう。そのような関係をあらしめる諸装置のあり方や、芸能が上演される場に宿つた演劇的想像力の所在を突き止めていくことができたかと考えている。

④偶像の系譜

深澤太郎(國學院大學准教授)

いま、國學院大學博物館で開催している「偶像の系譜」展は、現代のアイドルにはじまり、浮世絵に描かれた美少女、民俗芸能、神像、埴輪、そして土偶に至る偶像の具体例を列挙することによって、「偶像」とは何かを問うものである。この講座では、同展示の陳列品を紹介しながら、「偶像(アイドル)」の原型について考えてみたい。

さて、二十一世紀型の「アイドル」は、「会いに行ける」ことに大きな特徴がある。もつとも、かかる二十一世紀的アイドルの存在形態は、決して目新しいものではない。例えば、十八世紀後半に人気を博した明和の三美人は、谷中や浅草といった聖俗の境界にあたる都市的空間を拠点とし、彼女たちが勤める茶屋などに多くのファンが訪れた。そして、半ば神格化された絵姿を含む浮世絵

が、彼女たちの人気を再生産していく。つまり、ファンとの関わりにおいて、アイドルがアイドルたらしめられていったのである。また、世阿弥の『風姿花伝』や、金春禪竹の『明宿集』によれば、天石屋神話に見えるアメノウズメらの神楽が、猿楽の淵源の一つとされる。このように、まさに神に「会いに行く」技術が、日本芸能のはじまりと考えられてきた事実は興味深い。

一方、具体的な身体性を伴う「偶像」は、先に触れた浮世絵や芸能と同様に、「いま・ここ」にないものを可視化してくれる。人類は、旧石器時代のビーナス以来、様々な偶像を生み出してきた。しかし、日本列島においては、なぜか古墳時代に崇拜対象としての偶像の製作が低調になる。古墳時代は、かつて「百余国」に分かれていた倭が、都市の形成を含む政治的統合に向かい、いわば神習合とでもいべき宗教改革が起こった時代である。そして、後に天皇と呼ばれることになる大王らが、神に等しい存在として古墳に葬られた。即ち、人間が、目に見えぬ神霊の器としての役割を担う風習が支配的になったため、具象的な偶像の製作が低調になったのだろう。仏教の伝来に伴い、再び偶像をはじめとする具象的崇拜対象が復権していったが、超越的なものと出会うための儀礼は、次第に芸能化・大衆化しつつも、現代の日本文化の底流にあり続けている。

(文責・深澤太郎)

二十一世紀研究教育計画委員会研究事業 「古事記学」の構築」活動報告

はじめに

本事業は、二十一世紀研究教育計画(第三次)で提起された、「日本文化の国際的理解に向けた研究(国際日本学)の推進」を具現化する研究事業であり、日本文化の根幹を理解する鍵となる『古事記』について、國學院における従来の研究成果をふまえた上で、学際的・国際的視点から理解し、本学独自の「古事記学」の構築を目指すものである。

本学では皇典講究所の創立以来、神道・日本文化の根幹に関わる古典についての研究が継続して行われてきた。なかでも『古事記』については、伝統的には国学の総合性のもとに文学や神道学をはじめとする分野からの研究がなされてきた。そのため、本学における『古事記』研究は近代人文学が専門分化するなかにあっても、分野を超越した研究が出来る状況が整っていると見える。

また今年度は、文部科学省が推進する私立大学研究ブランディング事業選定校四〇校のひとつに本学が選ばれた。これによって本事業は、『古事記学』の推進拠点形成―世界と次世代に語り継ぐ『古事記』の先端的研究・教育・発信―として新たなスタートを切った節目の年となった。

以下、今年度の具体的な事業内容と成果を報告する。

平成二十八年度の成果

平成二十八年度は、五回の定期研究会と国際シンポジウムを行った。研究会の日程と内容は以下の通りである。

○第一回(五月二十五日、十六時～十七時三十分、於A M C五階会議室〇六)

・『古事記』の本文校訂14(三貴子の分治)―谷口雅博氏。
・年間計画の打ち合わせ。

○第二回(七月六日、十六時～十七時、於A M C五階会議室〇六)

・『古事記』の本文校訂15(須佐之男命の昇天)―谷口雅博氏。
・皇典講究所・國學院の神職養成と古事記―武田幸也氏。

○第三回(九月二十八日、十六時～十七時三十分、於A M C五階会議室〇六)

・『古事記』の本文校訂16(うけひ)―谷口雅博氏。
・『井戸の中の男』のアレゴリー解釈の発展について―ヒンドゥーから仏教、イスラームへ―岩瀬由佳氏。

○第四回(十月九日、十六時～十七時、於A M C五階会議室〇六)

・『古事記』祭神名の社会的受容と神社考証―地域神社を例に―藤本頼生氏。
○第五回(十一月九日、十六時～十

七時、於A M C五階会議室〇六)
・『古事記学データベース構築作業について』鍛谷僚氏。

これらの研究会では本学准教授の谷口雅博氏が作成した『古事記』の校訂本文・訓読文・注釈をもとに参加者から活発な討議がなされた。討議の内容は『古事記学』第三号収録の『古事記』注釈や同注釈補注および論考に反映される。なお今年度より、日本文化研究所が本事業との連携のもと、『古事記』注釈の英訳事業を開始した。既年度分の注釈から随時英訳を行い、本学HP上、また本事業の成果報告論集である『古事記学』で公開する予定である。学術的な立場からなされた『古事記』注釈の英訳は、いまだ存在していないため、海外へ『古事記』研究を拡げていくうえで大きな意味を持つであろう。

国際シンポジウムは、「神話の詩学―舞・歌・型―」と題し、平成二十九年一月二十一日(土)に本学百年記念講堂にて開催された。神話をテーマとした二部構成のシンポジウムであり、第一部は福岡県宮地嶽神社より宮司の浄見譲氏ほか舞い手の人々を招き、「受け継がれる神話的世界―宮地嶽神社のツクシ舞と巨石古墳」と題して同社で行われていたツクシ舞の解説と実演を行った。解説は宮司の浄見氏より「ツクシ舞と阿曇磯良」と題して宮地嶽神社の紹介や、ツクシ舞の由来の説明がなされた。ツクシ舞は舞の始祖と言われる阿曇磯良に起源を持つという。



ツクシ神舞「秋風の辞」(二人舞)

これまで神事芸能として人目に触れない環境で奉納されていたが、近年はアメリカでも公演がなされるなど、古くから続く貴重な芸能をなるべく多くの人に知ってもらう機会を設けているとのことである。実演で行われた舞の演目は以下の通りである。

①ツクシ神舞「秋風の辞」(二人舞)。

②八乙女舞「橘」(四人舞)。

③ツクシ神舞「浮神」(一人舞)。

第二部は「神話の詩学」と題し、本学研究開発推進機構助教である渡邊卓氏とフランス高等研究実習院(Ecole pratique des hautes études)教授のアラン・ロシェ氏による講演が行われた。渡邊氏からは「記紀歌謡の世界」と題した『古事記』『日本書紀』歌謡の解説が行われた。またロシェ氏からはフランスにおける



公開討論の様子

『古事記』研究の現状や、ポスト構造主義的な立場からの『古事記』に対する見解について講演があった。講演ののちには、本学研究開発推進機構准教授の平藤喜久子氏を司会として、浄見氏・渡邊氏・ロシエ氏の三氏による公開討論が行われ、活発な議論が交わされた。約二五〇名の来聴者が訪れ、盛況のうちに幕を

閉じたシンポジウムとなった。

成果の公開について

本事業の成果報告論集である『古事記学』は、今年度で第三号を迎える。本号では『古事記』注釈、昨年度に行われた国際シンポジウムおよびパネリストの講演内容、二本の論考、翻刻一本、そして『古事記』注釈の英訳を収録する。以上が今年度の本事業の成果である。

私立大学研究ブランディング事業

私立大学研究ブランディング事業は、「学長のリーダーシップの下、優先課題として全学的な独自色を大きく打ち出す研究に取り組み私立大学などに対し、経常費・設備費・施設費を一体として重点的に支援」する取り組みで、タイプA【社会展開型】、タイプB【世界展開型】からなり、本事業はタイプB【世界展開型】に採択された。

これにより本事業は、近世国学を継承する本学創立以来の研究蓄積を基盤に、二十一世紀の『古事記伝』編纂を目指し、『古事記』を人類共通の遺産として位置づけ、日本文化の独自性と普遍性を示すとともに、伝統文化継承の担い手を育成することを目的とし、平成二十九年度に向けて次の事業を展開した。

① 21世紀の『古事記』伝編纂

本学の神道学・文学・歴史学研究に加え、比較神話学・文化人類学研究、経済学・民俗学的研究を反映させた21世紀の『古事記伝』となりう

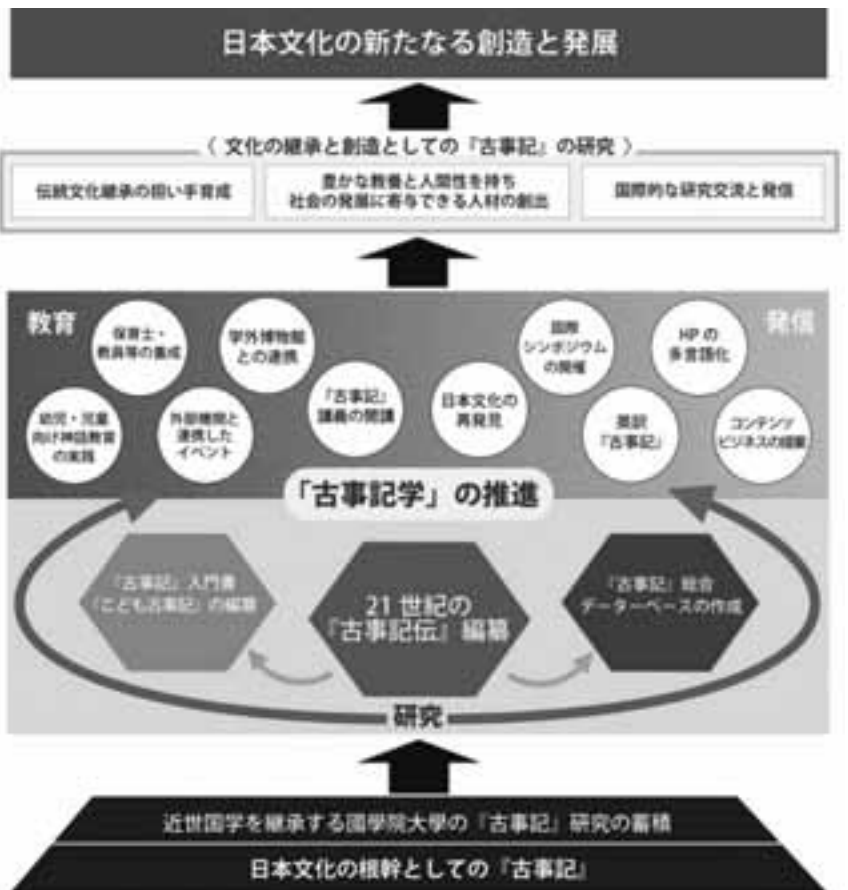
る注釈書を作成する。

② 『古事記』総合ライブラリー・データベースの作成

『古事記』に関連する国内外の資料の収集・デジタル化を始め、『古事記』関連の総合的データベース（研究文献・神名・事項・地名・人名・陵墓・神社等）を作成する。

③ 『古事記』入門書・『こども古事記』編纂

新たに『古事記』入門書を執筆・



編集し、一般向けの魅力的な書籍を提供する。また、幼児・初等教育に活用できるテキスト『こども古事記』を作成し、人間開発学部等と連携した教育実践を行う。

以上のような事業を通して、世界と次世代に『古事記』を語り継ぐ独自の拠点を形成し、日本文化の新たな創造と発展に本学が寄与していくことを目指す。

(文責・武田幸也)

二十一世紀研究教育計画委員会研究事業 「地域・渋谷から発信する共存社会の構築」活動報告

本事業は、國學院大學二十一世紀研究教育計画委員会の決定に基づき、学部横断型の学際研究事業であり、本学が立地する渋谷を研究領域とする「渋谷学」、地域・日本・グローバル化する社会を研究領域とする「共存学」から構成される。以下、本年度の「渋谷学」、「共存学」の活動内容を報告する。

「渋谷学」グループ

本年度は、昨年度に引き続き、現在進行中の再開発事業を見据えながら、渋谷の都市空間の歴史的な変遷過程を対象とする調査・研究を実施した。その成果は、渋谷の「にぎわい空間」の形成過程をテーマに学内外の研究者が執筆する『渋谷学叢書5 渋谷にぎわい空間を科学する』（雄山閣、平成二十九年三月）に掲載される。

同書「第一編（にぎわい）空間の形成」には、渋谷の「にぎわい空間」の基盤となった都市空間の形成過程を論じる以下の四本の論考を収める。「宮邸と渋谷―梨本宮家を中心に―」（内山京子）、「代々木練兵場の社会史」（吉田律人）、「國學院と校地「渋谷」―大学の歴史と文教地区の形成―」（渡邊卓）、「渋谷駅前の戦災復興―駅前広場・闇市・再開発―」（石博督和）。「第二編（にぎわい）の背景、行政・衛生・防災」には、渋谷の「にぎわい空間」を維持する仕組としての行政・衛生・防災の具体的取組

回渋谷学研究会「にぎわい」から渋谷を科学する」を平成二十八年八月一日に開催し、叢書執筆者の研究報告及び討論を実施した。

を考察する以下の三本の論考を収める。「戦後渋谷区の総合計画―昭和四八年「渋谷区長期基本計画」を中心に―」（手塚雄太）、「戦後の渋谷区における鼠駆除の変遷」（高橋奈津子）、「渋谷の防災・減災と宗教文化」（黒崎浩行）。「第三編（にぎわい）からみた祝祭空間」には、渋谷の「にぎわい空間」の実例やその特徴を分析する以下の四本の論考を収める。

「渋谷の花街と芸妓」（半戸文）、「渋谷の都市祭り」と地域社会―神田祭との比較を交えて―（秋野淳一）、「イメージと現実の渋谷―外来者と生活者からみる渋谷の空間―」（高久舞）、「SHIBUYAに聖地は似合わない―ポピュラーカルチャー―聖地巡礼」と渋谷―（飯倉義之）。

また、昭和三〇年代の國學院に通学していた九人の女性への聞き取り調査を実施し、それぞれの学生時代における渋谷や國學院に関する記憶を記録化して、『渋谷聞きがたり4 セピア色のころ―昭和三〇年代の國學院女子学生―』（平成二十九年二月）を刊行する。

公開研究会としては、第一回渋谷学研究会「現代社会と民俗学―民俗学の可能性を考える―」を平成二十八年七月二日に開催し（発題者等は彙報参照。以下同）、その記録を平成二十九年二月刊行の『都市民俗研究』第二十二号に掲載する。また、『渋谷学叢書5』に関連して、第二

去と現在―急速な観光地化にゆれる生き様と「共存」―」（黒澤直道）。「第二部 日本・歴史・宗教と共存する世界」には、日本における文化・宗教の共存を巡る様々な課題を検討する以下の三本の論考を収める。

その他、学部のオムニバス授業「総合講座（渋谷学）」を平成二十八年度後期に開講したほか、再開発事業を見据えながら、過去と未来の「渋谷らしさ」をテーマとして、平成二十七年十二月十二日に開催した第四回渋谷学シンポジウム「渋谷らしさの近未来」を基に、『別冊渋谷学ブックレット 渋谷らしさの近未来』（平成二十八年十一月）を編集・刊行した。

「共存学」グループ

東日本大震災以降、被災地調査を継続的に実施してきた「共存学」グループでは、引き続き被災地調査を実施したほか、「多文化世界」をテーマとする研究会を開催し、学外の執筆者にも協力を得て、『共存学4・多文化世界の可能性』（弘文堂、平成二十九年三月）を刊行する。

同書「第一部 グローバル世界における共存の諸相」には、世界の様々な場所における「共存」の在り方や模索の実際を検討する以下の五本の論考を収める。「音楽文化にみる現代フランスの移民と郊外―告発の声、融和への模索―」（笠間直穂子）、「イスラームとの多様な「共存」―マレーシア、イギリス、日本におけるムスリム女性―」（安達智史）、「共存の歴史として描かれたもの―ポーランドのユダヤ人の歴史博物館―」（加藤久子）、「台湾の多文化共存から「歴史」を考える―文化財保存の現場から―」（武知正晃）、「中国ナシ族の過

去と現在―急速な観光地化にゆれる生き様と「共存」―」（黒澤直道）。「第二部 日本・歴史・宗教と共存する世界」には、日本における文化・宗教の共存を巡る様々な課題を検討する以下の三本の論考を収める。「文化としての神道と多元主義」（松本久史）、「多文化共生」と宗教をめぐる研究が切り開く地平」（高橋典史）、「アメリカ生まれの新宗教と共存への模索―越境する宗教にみられる適応戦略の事例―」（杉内寛幸）。「第三部 グローバル変動下で共存を模索する試み」には、変動する世界動向を展望し、今後の世界における「共存」の在り方を検討する以下の四本の論考を収める。「トランプ時代におけるアメリカの多文化主義」（ヘイヴンズ・ノルマン）、「ナショナリズムの世俗性をめぐる断想―社会的共存とのかかわりを考える―」（菅浩二）、「多文化主義・社会関係資本・コスモポリタニズム―新しい「共存」イメージを求めて―」（菊田真司）、「持続可能な発展と多文化世界―環境・平和・人権・多様性をめぐる新動向―」（古沢広祐）。

その他、学部のオムニバス授業「國學院の学問（共存学）」を平成二十八年度前期に開講し、「地域（ローカル）と世界（グローバル）」を学ぶ・共存学の問い」をテーマに、個々の研究成果が教育に還元された。なお、平成二十九年三月一日には、安達智史氏（近畿大学総合社会学部講師）を迎えて、共存学公開研究会「多文化世界の可能性」を実施する予定である。

（文責・宮本蒼士）

平成二十八年度 國學院大學博物館活動報告

一、活動報告

平成二十八年度は、博物館の展示公開として特別展一回、企画展六回、特集展示を五回、西南学院大学博物館(福岡県)と当館間の研究協力協定に基づく相互貸借特集展示を六回開催した。また、本年度も文化庁「地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業」に採択された「東京・渋谷から日本の文化・こころを国際発信するミュージアム連携事業」(以下、連携事業)を展開・推進した(12頁を参照)。

二、展示公開

【特別展・企画展・特集展示】(表1)

・特別展「火焰型土器のデザインと機能 Jomoneseque Japan 2016」(展示図録刊行)、会期：平成二十八年十二月十日～平成二十九年二月五日。主催：当館、信濃川火焰街道連携協議会、新潟県立歴史博物館。後援：毎日新聞社、NPO法人ジョーモネスクジヤパン。※本特別展及び関連企画実施には、信濃川火焰街道連携協議会が、平成二十八年度文化芸術振興費補助金(日本遺産魅力発信事業)を受けた。

・企画展「偶像(アイドル)の系譜 神々と藝能の一万年」(展示図録刊行)、会期：平成二十八年四月二十六日～六月十二日。主催：当館。後援：毎日新聞社。

表1 平成28年度 展示公開と教育普及

展示(会期)	関連事業
特別展 火焰型土器のデザインと機能 Jomoneseque Japan 2016 (H28.12/10～H29.2/5)	フォーラム 国際縄文フォーラム「火焰街道往来2016」[中期縄文土器の過剰なデザインと多様な第二の道具] 12/10【基調講演】谷口康浩(本学教授)、河仁秀(韓国釜山近代歴史館館長) 12/11【報告討論】阿部昭典(千葉大学)、菅野智則(東北大学)、須崎玲美(相模原市教育委員会)、水ノ江和同(文化庁)、イローナ・パウシユ(東京大学)、石井匠(当館学芸員、今福和恵(山梨県埋蔵文化財センター)【講話】小林達雄(本学名誉教授)
	Museum Talk 12/17 石原正敏(十日町市博物館)、1/21 佐藤信之(津南町教育委員会)・齋藤孝太郎(エレキチェロ奏者)、1/28 小野博史(長岡市立科学博物館)、2/4 宮尾亨(新潟県立歴史博物館)
	コンサート 12/10、1/21 齋藤孝太郎(エレキチェロ奏者)
企画展 偶像(アイドル)の系譜 神々と藝能の一万年 (H28.4/26～6/12)	Museum Talk 5/7 深澤太郎(本学准教授)・石井匠、5/14 藤澤紫(本学教授)
	Special Museum Talk 5/21 村上紀夫(奈良大学准教授)、深澤太郎、5/28 石守晃(群馬県埋蔵文化財調査事業団上席専門員)、深澤太郎
	Museum Talk 6/18、7/2 根岸茂夫(本学教授)
	プロガー内覧会 7/20 中村正明(本学准教授)
	Museum Talk 7/30、8/27 中村正明
	シンポジウム 9/3 渡来文化 ネットワーク・サミット in 東京「東アジアの国際交流-古代から未来へ-」(記念講演) 山崎雅稔(本学助教)、田中史生(関東学院大学教授) 【事例発表】 森川裕一(奈良県明日香村長)、各地域団体事例発表
	Museum Talk 9/24 高麗文康(高麗神社宮司)・深澤太郎
	Museum Talk 10/22 鈴木聡子(本学助教)、10/29 大東敬明(本学准教授)、11/12 笹生衛(本学教授・当館館長)、12/3、4 大東敬明
	上映会 11/5、11/20 民俗誌映像「祭りに生きる 京都の絆 差し」上映
	Museum Talk 2/25 渡邊卓(本学助教)、3/4 岡田莊司(本学教授)、3/18 大東敬明、4/1 渡邊卓
特集展示 教派神道連合会共催 登拝と行(H28.6/1～6/30) 大津絵の展示(H28.7/4～7/10)	Museum Talk 7/7 クリストフ・マルケ(国立東洋言語文化大学教授)
	映画上映会 9/17 長編アニメーション映画「死者の書」
	講演会 9/17 辰巳正明(本学名誉教授)、10/8 持田叙子(日本近代文学研究者、本学兼任講師)
	Museum Talk 9/10 近藤ようこ(漫画家)、9/17 小川直之(本学教授)、9/24 近藤ようこ、小川直之
八幡さま(H28.9/17～10/10)	-
インドの祈りと神々(H28.10/29～12/6)*	ワークショップ 11/19 世界の宗教を知るワークショップ Part 1 2.「ヨガで知るインド-インドの信仰と哲学」の「世界-」* アルン・クマル・ヴァガイ(ヨガ指導者)、陣内理良(当館学芸員)
國學院大學博物館 ICON-キリスト教の聖像画-(H28.4/24～7/23) 会場：國學院大學博物館	
山岳霊場の考古学(H28.5/26～9/27) 会場：西南学院大学博物館	
描かれた「DEJIMA-出島-」(H28.7/25～11/11) 会場：國學院大學博物館	
漢代の世界観-鏡と明器に見る古代中国文化-(H28.9/27～H29.1/27) 会場：西南学院大学博物館	
キリスト教信仰のかたち-祈りの道具に見る多様性-(H28.11/13～H29.3/1) 会場：國學院大學博物館	
「神道」の原型-古墳時代における祭祀遺跡-(H29.1/27～5/24) 会場：西南学院大学博物館	

*は、東京・渋谷から日本の文化・こころを国際発信するミュージアム連携事業

・企画展「古文書で(つなぐ)江戸時代」、会期：平成二十八年六月十七日～七月十六日。主催：当館。
・企画展「國學院大學学びへの誘い『江戸文学の世界-江戸戯作と庶民文化-』(展示図録刊行)、会期：平成二十八年七月十九日～八月二十八

日。主催：國學院大學。後援：渋谷区、毎日新聞社、國學院大學若木育成会、一般財団法人國學院大學院友会。
・企画展「武蔵国高麗郡建郡1300年 日本に根付いた渡来人-高麗郡と高麗神社-」、会期：平成二十八年九月三日～十月十日。主催：当館、高麗神社。後援：毎日新聞社。
・企画展「祭祀行列-渡る神と人-」、会期：平成二十八年十月十五日～十一月四日。主催：当館。後援：毎日

表2 平成28年度 入館者数

月	(名)
4月	4,670
5月	6,459
6月	5,598
7月	7,021
8月	3,726
9月	5,361
10月	6,511
11月	4,677
12月	3,472
1月	7,227
合計	54,722

平成29年1月末日現在

・企画展「祭祀と神話-神道入門-」、会期：平成二十九年二月十一日～四月九日。主催：当館。
・特集展示は表1を参照。
三、教育普及
教育普及事業では、展示公開事業と連動したミュージアムトーク、フォーラム、講演会、上映会等に加え、連携事業に参画する連携館や外部の施設・団体と協力し、各種展示やワークショップ、シンポジウム等を実施した(詳細は表1及び12頁を参照)。
四、環境整備・営繕
この他、ローケースのLED化や免震展示ケースの配備、大型スクリーンディスプレイの営繕、コインロッカーの設置等、設備の充実化を図った。
今年度入館者数は、平成二十九年一月末日現在、五万四千人を超え、前年度の入館者数約四万五千人を大幅に上回り、現在も記録を更新している。今後も本学の研究・学術資料の公開を中心に、さらなる國學院大學の魅力発信できる博物館運営を目指していく。
(文責：國學院大學博物館)

平成二十八年年度 文化庁「地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業」 東京・渋谷から日本の文化・こころを国際発信する

ミュージアム連携事業・報告

一、事業の目的

本事業は、平成二十六年度の文化庁「地域と共働した美術館・歴史博物館創造活動支援事業」による「東京・渋谷から日本の文化を発信するミュージアム連携事業」を発展的に推進するため、平成二十七年年度に引き続き採択された、平成二十八年度文化庁「地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業」の「東京・渋谷から日本の文化・こころを国際発信するミュージアム連携事業」を実施するものである。

國學院大學博物館を中核館とし、渋谷区・山種美術館・東洋文庫と、本年度より新たな構成団体として日仏会館・フランス国立日本研究センターと国立オリンピック記念青少年総合センターを加えた國學院大學博物館地域共働連携事業実行委員会（実行委員長・赤井益久学長）が実施する事業である。本事業はこれまでの事業同様、連携館相互の知的・物的資源の活用と交流を図り、文化の発展や地域社会の振興、学術研究の向上、人材育成、生涯教育に寄与することを目的とする。本年度は、過去二年間の取り組みによって事業展開が一層円滑になってきた渋谷界隈のミュージアム連携や、国際的連携拠点の構築を基盤として、地域と世界を結び付け、相互の文化理解を促

進し、世界に開かれた文化都市・渋谷の形成に資することを更なる目的として実施した。

以下に示す(一)～(四)までの事業は、ミュージアムに外国人を誘引したうえで、日本文化研究発信の国際的連携拠点を、当館を中心とする渋谷地域に実現することを目的とし、さらに、日本文化・渋谷文化の普及や日本文化と異文化の相互の送受信を試みるために、それぞれの事業が相互に補助しあう関係にある。

このような事業フローの構築は、ミュージアムによる教育・普及コンテンツを充実させるものであり、特に訪日外国人の増加を見据えたサービスの充実に向けたモデルケースを提供することも目指した。

以上の取り組みによって、ミュージアムにおける展示活動を背景として、外国人向けサービスと、来館者の日本文化・異文化体験を充実させることが、平成二十八年度内に期待される主な効果と目的であった。

二、事業の概要

本事業は四つの事業の柱で構成され、以下にその概要と報告を示す。

(一)「外国人来館者への対応サービス向上と館内環境の充実(事業(区分)「多言語化による国際発信」)

本事業は、中核館とその近隣にあ

る連携館において、来館した外国人による資料・作品理解を支援するために、展示環境や情報発信機能の多言語対応力をともに向上させていく連携事業である。多言語化は平成二十六年年度から継続的に取り組んでおり、昨年度はホームページや館内サイン、リーフレットなどのインフラ整備が本格的に行われ、本年度は、それらを基盤にした事業の一層の推進が図られた。

具体的には、①中核館において、新たに雇用したネイティブ外国人スタッフによる外国語サービス力の向上を試みた。同スタッフは、館内の様々な案内や解説の翻訳業務のほか、各企画展の案内文、解説シートの翻訳業務を行い、これにより本年度の多くの企画展が外国語での解説シート対応が可能となった。しかし、英語による外国人来館者の案内業務や学芸員の外国語能力開発の支援に関しては次年度の課題として残った。

②山種美術館では、昨年度に引き続き、展覧会での多言語解説環境のさらなる充実を図る事業を実施し、



英語化された企画展の解説シート

外国人への日本文化理解の推進に努めた。

③また、中核館である國學院大學博物館は先史時代から近代に至る日本文化を研究し、その成果を展示に反映させている。そこで、本事業では博物館とデジタルミュージアムで公開予定の資料に関する調査を行い、新たな知見と最新の画像取得を試みた。これにより今後、展示パネルや資料解説に、その内容を多言語化とともに反映させ、様々な母国語を持つ来館者・サイト閲覧者に対応していく準備が進められた。

(二)「博物館を核にした地域の文化交流」事業(区分「地域とともにある美術館・歴史博物館」)

本事業は、事業企画機関で行われた調査研究の成果を広く地域の人々へも公開することにより、各機関が地域における学びの場の一つとなることを目的としたものである。

昨年度に引き続き、白根記念渋谷区郷土博物館・文学館と協力し、「紙すき」「勾玉づくり」「夏休み子ども歴史講座」の三つの体験型ワークショップを実施した。

このほか、国立オリンピック記念青少年総合センターとの連携で、体験型ワークショップ「しぶや探検！」が企画され、「I. 渋谷の神社を見てみよう！」「神主とめぐる神社ツアー」と「II. 芸術は爆発だ！」渋谷で出会う岡本太郎と縄文」の二回のイベントが開催された。同イベントはいずれも渋谷を舞台とし、地域に根差した日本文化の体験に主軸が置かれたもので、日本文化普及

活動事業を継続させるものとなった。

(三)「グローバル視点にみる日本文化の発信における考察と試み」事業(区分:「地域のグローバル化拠点としての美術館・歴史博物館」)平成二十七年年度の文化庁採択事業で行なわれた国際シンポジウムでは、海外から招聘された学芸員と今後の博物館の国際的ネットワークの可能性についての議論がなされた。本事業は、この成果を踏まえ、国内外のいくつかの館の現場を見聞し、あらたな着想を得、今後の研究・情報支援・運営に反映させることを目的として実施した。

国内としては、三重県・滋賀県内にある美術館・博物館を視察対象とし、外国人対応および多言語化の実態調査を行った。特に外国人対応に関しても積極的な取り組みがなされている施設を対象とし、その結果、当館における今後の日本文化のより積極的な国際発信に向けて、具体的な提案が可能となった。

海外としては、イギリス・アメリカを対象として、現地の博物館・美術館での視察調査を行った。展示技術や、多言語化の状況について出来る限り多くの施設を訪問し、当館の展示に反映できる点を積極的に調査した。これに加え、各施設での日本展示の状況も視察対象とし、現地における日本文化発信の現状の確認も行なった。その結果、より一層の情報発信の必要性はもとより、世界の研究者と共通の基盤を模索することの緊急性を感じた。



大英博物館にて日本展示を視察

また、本年度より加わった、日仏文化交流の中心機関である日仏会館・フランス国立日本研究センターと連携したイベントを開催。大津絵の展示とクリストフ・マルケ氏による当館でのミュージアムトークや海外から研究者を招いての講演会、連携館である東洋文庫と共催したワークショップなど、海外における日本文化の受容及び研究について、発展的な活動を行った。それはフランスの日本文化研究の成果を博物館との関わりの中核発信し、また中核館



日仏会館・フランス国立日本研究センター所長(当時)クリストフ・マルケ氏によるミュージアムトーク

を基盤とした國學院大學の日本文化研究の海外発信の機会となった。

(四)「新たな視点による日本文化と」ここを発信する多元的事業(区分:「新たな機能を創造する美術館・歴史博物館」)

本事業では、多様な来館者のニーズに応えるため、①世界との比較から日本の文化とところを学ぶ、②日本の伝統・歴史から日本の文化とところを学ぶという二本柱に加え、③障がい者の鑑賞活動支援の試みを加えた三つの柱で構成された。①と②では、平成二十七年年度から実施している「世界の宗教を知る」ワークショップにおいて、「神道」「ヒンドゥー教」「キリスト教」について体験型ワークショップを実施した。こ



「世界の宗教を知る」ワークショップ<第3回 神道>

れに加え、「イスラームと文化遺産」「世界の宗教はなにを禁じてきたか」というテーマで特別講演も行った。日本の文化を見つめ直す意味を持つと同時に、世界の宗教文化についての理解を深める内容に、多くの参加者が集まった。

さらに、「渡来文化から学ぶ日本文化」として、東アジアから伝来した渡来文化によって育まれた日本文化への影響を考古資料と歴史資料から学ぶ多元的な事業を企画し、ゆかりのある埼玉県高市の高麗神社の協力のもと、「東アジアの国際交流」と題した渡来文化ネットワーク・サミットを開催した。

また、例年実施している浮世絵摺り体験は、これまでの企画に加え、初めての試みとして、外国人をターゲットにした「日本の伝統文化体験」としても実施。外国人へ向けた初の英語でのワークショップとなり、外国人への日本文化理解を促進させる事業の具体的な活動となった。

③は新たな試みとして、障がいのある方にとって、まだまだ開かれた環境とはいえない美術館・博物館へのアクセスの可能性を探るべく、障がい者向けの鑑賞支援を試みる機会とした。当館にて、視覚障がい者が考古遺物を解説とともに実触できるイベントを実施し、これからの博物館、美術館における障がい者向けの鑑賞支援の可能性について検討する重要な契機となった。

(文責: 國學院大學博物館地域共働連携事業実行委員会)

彙報

会議

○全体

- ・平成二十八年度第二回企画委員会、平成二十八年七月二十日(水)十一時～十一時四十分、A M C棟五階会議室○六
- ・平成二十八年度第三回企画委員会、平成二十八年十月五日(水)十一時～十二時、A M C棟五階会議室○六
- ・平成二十八年度第一回人事委員会、平成二十八年十月五日(水)十二時～十二時二十分、A M C棟五階会議室○六
- ・平成二十八年度第一回教員等資格審査委員会、平成二十八年十月五日(水)十二時三十分～十二時四十五分、A M C棟五階会議室○六
- ・平成二十八年度第二回運営委員会、平成二十八年十月十三日(木)十六時～十六時三十一分、若木タワー四階会議室○五
- ・平成二十八年度第四回企画委員会、平成二十八年十一月三十日(水)十一時～十一時五十分、A M C棟五階会議室○六
- ・平成二十八年度第二回人事委員会、平成二十八年十一月三十日(水)十二時～十二時二十分、A M C棟五

階会議室○六

- ・平成二十八年度第二回教員等資格審査委員会、平成二十八年十一月三十日(水)十二時三十分～十二時四十五分、A M C棟五階会議室○六
- ・平成二十八年度第三回人事委員会、平成二十九年一月十一日(水)十二時十五分～十二時四十分、A M C棟五階会議室○六
- ・平成二十八年度第三回教員等資格審査委員会、平成二十九年一月十一日(水)十二時四十五分～十三時十五分、A M C棟五階会議室○六
- ・平成二十八年度第三回運営委員会、平成二十九年一月十二日(木)十六時十五分～十七時、若木タワー四階会議室○五
- ・平成二十八年度第五回企画委員会、平成二十九年一月二十五日(水)十一時～十二時、A M C棟五階会議室○六

○日本文化研究所

- ・平成二十八年度第二回所員会議、平成二十八年七月六日(水)十一時～十二時十五分、A M C棟五階会議室○六
- ・平成二十八年度第三回所員会議、平成二十八年九月二十一日(水)十一時～十一時五十五分、A M C棟五階会議室○六
- ・平成二十八年度第四回所員会議、平成二十八年十一月十六日(水)十一時～十二時、A M C棟五階会議室○六
- ・平成二十八年度第五回所員会議、平成二十九年一月十一日(水)十一時～十一時五十五分、A M C棟五階

会議室○六

○学術資料センター

- ・平成二十八年度第二回学術資料センター会議、平成二十八年九月二十日(火)十三時～十三時四十分、A M C棟五階プロジェクトルーム二
- ・平成二十八年度第三回学術資料センター会議、平成二十八年十二月五日(月)十四時七分～十四時二十分、A M C棟五階プロジェクトルーム二

○校史・学術資産研究センター

- ・平成二十八年度第二回校史・学術資産研究センター会議、平成二十八年九月十四日(水)(持ち回り稟議)
- ・平成二十八年度第三回校史・学術資産研究センター会議、平成二十八年十二月十三日(火)(持ち回り稟議)

○研究開発推進センター

- ・平成二十八年度第二回研究開発推進センター会議、平成二十八年九月十四日(水)十三時～十三時四十五分、A M C棟五階プロジェクトルーム二

○國學院大學博物館

- ・平成二十八年度第二回國學院大學博物館会議、平成二十八年七月二十七日(水)十四時～十五時、A M C棟地下一階博物館ワークショップスペース
- ・平成二十八年度第三回國學院大學博物館会議、平成二十八年九月二十日(火)十四時～十五時、A M C棟地下一階博物館ワークショップスペース

公開講座 講演会・シンポジウム・関連学会

○全体

- ・公開学術講演会「描かれた近世の祭礼」、平成二十八年十月二十二日(土)十五時～十六時三十分、A M C棟一階常磐松ホール、講師〓福原敏男(武蔵大学教授)

○日本文化研究所

- ・SISR2017準備 東アジア国際ワークショップ「東アジアのグローバル化と宗教文化」、平成二十八年十月十五日(土)十時～十八時、A M C棟五階会議室○六
- ・国際研究フォーラム「東アジアのグローバル化と宗教文化」、平成二十八年十月十六日(日)十三時～十七時三十分、A M C棟二階常磐松ホール、パネリスト〓 Benjamin Penny (オーストラリア、Australian National Univ.)、Wei-hsian Chi (台湾、Academia Sinica)、川田進(大阪工業大学)、井上順孝(國學院大學)、コメンテーター〓 岩井洋(帝塚山大学)、司会〓 櫻井義秀(北海道大学)

○学術資料センター

- ・ミニシンポジウム「神輿文化を考える」、平成二十八年十一月二十六日(土)十三時三十分～十七時、A M C棟五階会議室○六、講演〓 笹生衛(國學院大學教授)「神輿の発生」、講演〓 西山剛(京都府京都市文化博物館学芸員)「神をかつぐ人々―祭礼行列の中核としての神

興と京都市民」、講演三「岸川雅範(神田神社権禰宜)「神輿の近代」大正期に盛り上がった東京の祭礼」

○研究開発推進センター

・平成二十八年度第一回渋谷学研究会、テーマ「現代社会と民俗学―民俗学の可能性を考える―」、平成二十八年七月二日(土) 十三時三十分～十七時三十分、A.M.C棟五階会議室○六、講師「飯倉義之(國學院大學准教授)、八木橋伸浩(玉川大学教授)、岩崎真幸(みちのく民俗文化研究所代表)、コメンテーター「新谷尚紀(國學院大學教授)、コメンテーター」/司会「小川直之(國學院大學教授)」

・平成二十八年度第二回渋谷学研究会、テーマ「(にぎわい)から渋谷を科学する」、平成二十八年八月一日(月) 十七時～十九時十分、A.M.C棟五階会議室○六、第一報告「秋野淳一(國學院大學研究開発推進機構ポスドク研究員)、第二報告「半戸文(國學院大學大学院文学研究科博士課程後期)、司会「上山和雄(國學院大學教授)、コメンテーター「林和生(國學院大學教授)、佐藤豊(渋谷区郷土写真保存会副会長・写真家)」

・「古事記学」の構築「国際シンポジウム、テーマ「神話の詩学―舞・歌・型―」、平成二十九年一月二十一日(土) 十四時～十七時三十分、百周年記念館四階百周年記念講堂、第一部「受け継がれる神話の世界―宮地嶽神社の「ツクシ舞」と巨石

出張

古墳―」、講師「浄見讓(宮地嶽神社宮司)、第二部「神話の詩学」、講師「渡邊卓(國學院大學研究開発推進機構助教)、アラン・ロシェ(フランス高等研究実習院教授)、司会進行「平藤喜久子(國學院大學研究開発推進機構准教授)」

○日本文化研究所

・井上順孝・平藤喜久子、「宗教文化教育の教材に関する調査・研究」のため、平成二十八年十一月二十六日(土)～十一月二十七日(日)、大阪府吹田市

○学術資料センター

・内川隆志・深澤太郎・大日方一郎、「旧鞍山中学校歴史研究室関係資料(梅本俊二氏寄贈資料)調査」のため、平成二十八年七月五日(火)～七月八日(金)、中華人民共和国北京市、遼寧省鞍山市

・内川隆志・深澤太郎・朝倉一貴・尾上周平、「前近代の金華山における信仰空間の具体的な把握のための現地踏査」のため、平成二十八年十月二十九日(土)～十月三十日(日)、宮城県石巻市

・黒崎浩行・深澤太郎・尾上周平、「金華山および女川町における現地踏査」のため、平成二十八年十二月十日(土)～十二月十一日(日)、宮城県石巻市、牡鹿郡女川町

○校史・学術資産研究センター

・渡邊卓、「全国大学史資料協議会二〇一六年度総会ならびに全国研究会に出席」のため、平成二十八年十月六日(木)～十月八日(土)、広島県広島市

○研究開発推進センター

・古沢広祐・茂木栄・杉内寛幸、「熊本地震被災地の復興に関する現地調査」のため、平成二十八年七月二十五日(月)～七月二十八日(木)、熊本県熊本市、阿蘇市

・古沢広祐・菅浩二、「生物多様性条約第十三回締約国会議出席」のため、平成二十八年十二月十一日(日)～十二月十七日(土)、メキシコ・キタナ・ロー州カンクン

○國學院大學博物館

・内川隆志・及川聡、「平成二十八年度特別展『火焰型土器のデザインと機能』(omnesque Japan 2016)に伴う打合せ」のため、平成二十八年六月十五日(水)、新潟県長岡市

・内川隆志・及川聡・網谷哲成、「国内博物館の外国人対応および地域連携の実態調査」のため、平成二十八年七月二十二日(金)～七月二十三日(土)、三重県津市、松坂市、伊勢市(※)

・深澤太郎・尾上周平、「西南学院大学博物館・國學院大學博物館「相互貸借特集展示」展示替え」のため、平成二十八年九月二十七日(火)～九月二十八日(水)、福岡県福岡市

・笹生衛・大東敬明・陣内理良、「英国国内の博物館、文化・宗教施設における、展示、解説、多言語化の状

況についての調査」のため、平成二十八年十一月一日(火)～十一月八日(火)、イギリス・ロンドン、ノーリッジ(※)

・内川隆志、「全国博物館大会参加」のため、平成二十八年十一月十六日(水)～十一月十八日(金)、群馬県高崎市

・井上順孝・齋藤公太・和知亮・矢野美紗子、「國學院大學博物館展示資料に関連する画像・映像収集のための現地調査」のため、平成二十八年十一月二十二日(火)～十一月二十四日(木)、宮崎県日南市、宮崎市、西臼杵郡、児湯郡(※)

・内川隆志・石井匠・陣内理良、「国内博物館の外国人対応および地域連携の実態調査」のため、平成二十八年十二月二日(金)～十二月三日(土)、滋賀県草津市、甲賀市(※)

・井上順孝・齋藤公太・西尾拓海・仲鉢史也、「國學院大學博物館展示資料に関連する画像・映像収集のための現地調査」のため、平成二十九年一月十四日(土)～一月十六日(月)、香川県高松市、仲多度郡、徳島県鳴門市、徳島市、高知県高知市、愛媛県今治市(※)

・深澤太郎・北澤宏明、「西南学院大学博物館・國學院大學博物館「相互貸借特集展示」展示替え」のため、平成二十九年一月二十六日(木)～一月二十七日(金)、福岡県福岡市

(※)は、平成二十八年度文化庁「地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業」に採択された、「東京・渋谷から日本の文化・こころを国際発信するミュージアム連携事業」にて実施。

資料紹介 創立七十周年 高松宮宣仁親王殿下御言葉



周年を慶祝したのであった。

これに遡ること十月七日に石川岩吉学長は、皇典講究所初代総裁である有栖川宮熾仁親王の祭祀を継承される高松宮家に参殿し、同宮殿下の記念式への御臨場を願ひ出て御許可を得たのであった。

十一月四日に「創立七十周年記念式」が開催され、高松宮殿下がお越しの際には、学生徒約一千名が整列し、学長、理事は玄関にお出迎え申し上げた。当日、午前十時から本学大講堂にて挙行された式典の次第は以下の通りである。

校史・学術資産研究センターでは、本学創立七十周年の際に高松宮宣仁親王殿下より賜った御言葉を所蔵する。殿下による揮毫ではないが、昭和二十七年の本学創立七十周年の式典に御台臨あらせられた際に、賜ったものである。

創立七十周年の記念式典は、十月十二日の記念学術講演会に始まり、十九日には久我山分校（現國學院大學久我山）において記念運動会を開き、同二十六日には目白分校（現國學院高校）において同じく運動会を行い、さらに十一月二日より五日にかけて全国の高等学校の柔道・弓道・卓球の選手を招待して記念の体育大会を開催した。また、本校の学生は四日から七日にわたって各種の展覧会をはじめ諸種の催し物や展覧会を催して創立七十周年の学問の跡を偲ぶなど、全学を挙げて七十

- 一、神殿奉告祭 午前八時（神前）
- 一、一同着席 午前九時三十分
- 一、高松宮殿下御臨場
- 一、開式の辞
- 一、祝典委員長挨拶
- 一、国家斉唱
- 一、学長式辞
- 一、高松宮殿下御言葉
- 一、来賓祝辞
 - 文部大臣
 - 神社本庁総理
 - 日本私立大学連盟会長
 - 國學院大學院友会長
- 一、勤続並功労者表彰
 - 表彰の辞 祝典委員長

- 一、被表彰者総代謝辞
- 一、校歌
- 一、閉式の辞
- 一、高松宮殿下御退場
- 一、一同退場

高松宮殿下より賜った御言葉は、次の通りである。

創立以来七十周年の間、國學院大學が日本文化の講究に力を尽し、国民の伝統的精神を昂揚して時代の欠陥を矯正し、有為の人材を輩出せしめて、文運の進歩に貢献した功績は顕著なものであります。現時世界の形勢は重大な危局を孕み、これに善処して邦家の前途を安泰ならしめることは容易な業ではありません。況んや国力を充実して世界平和の一原動力となることなどは非常の重荷であります。それは是非果さねばならぬ我々の義務であります。私は本大学二十年前の式典に臨み、今日又ここに、進歩の迹を見て、感慨の浅からぬものがあります。どうか今後益々特色を発揮して、使命を全うせられるやう切に希望します。

本学にとって創立七十周年は大戦の悲境から立ち上がり、拡充整備を展開した時期である。そこから今年で六十五年が経過するが、この御言葉を大切に、本学は今後益々、文運の進歩に貢献し、その特色を発揮していくことが求められるであらう。

(渡邊卓)

